

令和 2 年 5 月 15 日現在

機関番号：26401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K20831

研究課題名（和文）高齢者のリロケーションを支援するケアガイドラインの開発

研究課題名（英文）Developing Care Guidelines to Support the Relocation of the Elderly

研究代表者

渡邊 美保（Watanabe, Miho）

高知県立大学・看護学部・講師

研究者番号：70571313

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、高齢者のリロケーションを支援するケアガイドラインを開発することである。先行研究から導いたケアガイドライン案の内容について、回復期病院に勤務する看護師14名を対象に半構造化面接を実施した。看護師は多職種と情報共有を行い、高齢者の安全を確保する一方、高齢者の今までのやり方を尊重していた。さらに、看護師は高齢者と共に発症前の生活状況を振り返ることで今後の目指す方向性を共有し、高齢者自身の自発性を高めていることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

高齢者は転院に伴い、心身の変化や混乱といったリロケーションダメージを引き起こしやすく、リロケーション（移転）を促進する看護は心身のダメージの緩和と新しい環境への促進を促す意味で重要とされている。しかし、急性期病院から回復期病院に転院する高齢者のリロケーションを促進する看護介入の方略は、十分明らかにされているとはいえない。本研究成果を活用することは、入院を繰り返す高齢者のリロケーションダメージを緩和するうえで重要なケアと考えている。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to develop care guidelines to support the relocation of the elderly. Semi-structured interviews were conducted with 14 nurses employed at rehabilitation hospitals regarding the care guidelines proposed by prior studies. Nurses carried out interdisciplinary information sharing, ensuring the safety of the elderly, while also respecting their way of life. Furthermore, it was revealed that the nurses increased spontaneity among the elderly by reflecting over their lives prior to illness and sharing their future goals to strive toward.

研究分野：看護学（老年看護学）

キーワード：高齢者 リロケーション ケアガイドライン

### 1. 研究開始当初の背景

2014年に医療介護総合確保推進法が公布され、医療機関の機能分化と連携が推進されている。回復期リハビリテーション病棟の患者の平均年齢は76.5歳であり、患者の71.8%が発症後平均30日以下（1か月以内）で入棟している（回復期リハビリテーション病棟協会，2019）。今後、急性期治療を終えた高齢者の移転（以下、リロケーション）頻度は、増々増加し、移行期間も短縮化することが予測される。

リロケーションは生活・空間の変化、対人的環境の変化、自己の変化を伴うものであり、混乱に遭遇しつつ、安定した生活を獲得するために対処や立て直しを行うものであり（渡邊ら，2014）、リロケーションを支援する看護ケアは、将来の高齢者の健康状態や生活に大きな影響を及ぼす。

本研究者は2014～2015年に研究活動スタート支援「高齢者のリロケーションを支援する看護ケア」において、高齢者の歩んできた人生史をもとに新たな生活への適応を検討すること、さらに、高齢者の持っている力を見定め、本来のその人らしい生活を創造できるように支援していくことの重要性を明らかにした。

今後、家から病院、病院から病院、病院から施設など超高齢社会の到来において、高齢者のリロケーションは増々活発化することが予測される。それゆえに、高齢者の心身のダメージの緩和と新しい環境への適応を促進するリロケーションケアの集積が急務である。本研究ではこれまで取り組んできた研究を基盤とし、『高齢者のリロケーションを支援するケアガイドライン』の開発に着手することとした。

### 2. 研究の目的

本研究では研究者が取り組んできた高齢者のリロケーションを支援する看護ケアの成果をもとにケアガイドラインを作成・試験活用し、洗練化された『高齢者のリロケーションを支援するケアガイドライン』（以下、ケアガイドライン）を開発する。

本研究の成果は、高齢者のリロケーションを支援するケア指針として活用することができ、リロケーションダメージの緩和、高齢者の在宅支援の充実、専門職種間の連携にも活用することが期待される。

### 3. 研究の方法

本研究は、Step1～Step3で構成し、4年間で実施した。

Step1では、本研究者が取り組んできた先行研究をもとに高齢者のリロケーションを支援するケアガイドライン（案）を作成した。

Step2では、Step1で作成したケアガイドライン（案）の有効性と内容の洗練化に向け、2018年1月15日～2018年5月22日に回復期病院に勤務する看護師14名を対象に半構造化面接を実施した。面接内容は、本研究者が作成した高齢者のリロケーションを支援するケアガイドライン（案）の内容に対し、実際に高齢者のリロケーションに関わった事例のなかで、印象に残っている場面とその看護ケア、介入の意図について自由に語っていただいた。加えて、用いている用語や概念は臨床で活用しやすい表現になっているか、記載されていない内容で新たに追加したほうがよいと思う看護ケアについて意見をもらった。面接はプライバシーの確保できる個室で行い、研究協力者の許可を得て、面接内容をICレコーダーに録音した。

得られたデータは、個別に逐語録に起こし、高齢者のリロケーションを支援する看護ケアとその意図を抽出した。その後、全体を統合し、高齢者のリロケーションを支援する看護ケアの類似点を統合した。

Step3は、先行研究で明らかになった高齢者のリロケーションを促進する看護介入（渡邊ら，2018）から作成したケアガイドライン（案）の枠組みにStep1の内容を新たに追加・統合し、再構成を行った。再構成した看護介入・看護ケアの内容は、専門家の意見を聴取し、修正することを計画した。

### 4. 研究成果

Step1で作成した高齢者のリロケーションを支援するケアガイドライン（案）は、研究者のこれまで行ってきた研究をもとに13の看護ケアと【心地よい場づくり】【生活思考への切り替え】

【先を見据えた時間軸の見定め】【希望と現実のすり合わせ】【内包する力の拡張】の5つの看護介入から構成された（渡邊ら，2018）。

表1 高齢者のリロケーションを促進する看護介入

看護介入	看護ケア
心地よい場づくり	ここに来てよかったという実感を高める
	自分好みの場に創造することを支える
	余計な気をつかわない関係性を構築する
生活思考への切り替え	その人らしい生活の流れをつくる
	当たり前とを感じる生活を醸成する
	治療から生活に向けた思考転換を促す

先を見据えた時間軸の見定め	移り変わる先の道筋を映し出す
	起こりうるリスクを査定し未然に食い止める
希望と現実のすり合わせ	回復への期待と落胆を押し量る
	現実に見合った方向に希望を修正する
内包する力の拡張	生活行動を起点に身体機能の回復を高める
	病を抱えつつ自分でできるという自信に働きかける
	内在する力を見積もり引き出す

Step2では、回復期病院に勤務する看護師14名を対象に、半構造化面接を実施した。面接内容は、ケアガイドライン(案)の13の看護ケアと30の看護行動の内容について実際に高齢者のリロケーションに関わった事例のなかで、印象に残っている場面とその看護ケア、介入の意図について自由に語っていただいた。その後、個別分析、全体分析を行い、新たに54の看護行動、6の看護ケアが抽出された。

先行研究では生活環境の整備、訴えの傾聴と観察、他者との触れ合いの支援、ケア提供者自身が適応を左右することを自覚した関わり(小松ら,2013)や資源リストの準備、高齢者の好みのアセスメント(Hertz et al.,2007)といった研究が主であった。一方、本研究では、高齢者の心身の状態変化を予測し、環境設定や見守りをもとに主体性を促進する働きかけが抽出された。そのなかで、看護師は多職種と情報共有を行い、高齢者の安全を確保する一方、高齢者の今までのやり方を尊重していた。さらに、看護師は高齢者と共に発症前の生活状況を振り返ることで今後の目指す方向性を共有し、高齢者自身の自発性を高めていることが明らかとなった。

加えて、患者同士の交流の輪を広げる介入が新たに見出されたことは特記すべき点である。患者同士の交流の輪を広げる介入は、看護師が主体的に何かを行うというより、患者同士の交流の場を設け、高齢者が能動的に心地よい場を構築する働きかけである。これらの背景には、ケアの対象者が急性期病院から回復期病院へ転院する高齢者であることも挙げられる。特に回復期では、集中的なリハビリテーションにより、日常生活動作の変化が著しく、安全に留意しながら患者自身のできることを見守る姿勢が求められる。さらに、急性期から回復期病院へのリロケーションは、新たな環境、人間関係、リハビリテーションに馴染むことから始まり、運動麻痺など生活制限の大きな変化に迫られる。つまり、医療者だけでなく、同じ病気の経験をもつ患者同士の交流の場を広げることは、身体的変化や場の変化に伴う気持ちの整理、現在のリハビリ期、その先の生活期を見通す基盤になっていると考える。

## 5. 今後の課題

本研究は、研究者が先行研究をもとに考案した高齢者のリロケーションを支援するケアガイドライン案の臨床活用に向け、回復期病院に勤務する看護師を対象に半構造化面接を実施した。得られた看護ケアと看護行動は、ケアガイドライン(案)に追加・統合し、再構成を行った。最終年度には、作成したケアガイドライン(案)に用いている用語や概念を再検討した。そして、その内容について、老人看護専門看護師や脳卒中リハビリテーション看護認定看護師などから幅広く助言をいただく予定にしていた。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大予防のため、Step3に対しては、十分に実施できなかったことから、引き続き継続して検討が必要である。

今後、作成した高齢者のリロケーションを支援するケアガイドライン(案)は、専門家、実践者の意見をもとに再構成するとともに、全国の回復期病院の看護師を対象に質問紙調査を実施し、妥当性・活用可能性を検証する。さらに、学会等の場を含め、実践者・研究者の意見を幅広く意見を聴取し、臨床活用を目指す。

## 引用文献

- 1) 回復期リハビリテーション病棟協会 (2019) : 平成 30 年度回復期リハビリテーション病棟の現状と課題に関する調査報告書【修正版】 , pp30, 36, 東京.
- 2) Hertz JE, Rossetti J, Koren ME., et al. (2007).Evidence-based guideline : management of relocation in cognitively intact older adults, Journal of Gerontological Nursing, 33 (11), 12-18.
- 3) 小松美砂, 濱畑章子, 佐藤光年 (2013) : 認知症高齢者の施設へのリロケーション適応に関連する要因と早期介入, 日本認知症ケア学会誌, 12(2), 504-509.
- 4) 渡邊美保, 野嶋佐由美 (2014) : リロケーションの概念分析, 高知女子大学看護学会誌, 40 (1), 2-12.
- 5) 渡邊美保, 野嶋佐由美 (2018) : 急性期病院から回復期病院へ転院する高齢者のリロケーションを促進する看護介入の全体構造, 高知女子大学看護学会誌, 44(1), 81-93.

## 主な論文・発表等 (研究代表者には下線)

[論文] (計1件)

- 1) 渡邊美保, 野嶋佐由美 : 急性期病院から回復期病院へ転院する高齢者のリロケーションを促進する看護介入の全体構造, 高知女子大学看護学会誌, 44(1), 81-93, 2018.

[学会発表] (計 4 件)

- 1) Miho Watanabe, Sayumi Nojima: Nursing Interventions That Facilitate Relocation of Older Adults: Focusing on Reconciling Hopes with Reality, The 6th International Research Conference of World Academy of Nursing Science, 28-29 February, 2020, in Osaka, Japan.
- 2) Miho Watanabe, Sayumi Nojima: Nursing Interventions That Facilitate Elderly Relocation from the Acute to Maintenance Phase, 23rd EAFONS 2020, January 10 and 11, 2020, Tai.
- 3) Miho Watanabe, Sayumi Nojima: Nursing Intervention to Improve Elderly patients Relocation from Hospital, EAFONS 2019, 17th January 2019, Singapore.
- 4) 渡邊美保, 野嶋佐由美: 高齢者のリロケーションを促進する看護介入～心地よい場づくりに焦点をあてて～, 第 23 回日本老年看護学会学術集会, 2018.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 渡邊美保、野嶋佐由美	4. 巻 44
2. 論文標題 急性期病院から回復期病院へ転院する高齢者のリロケーションを促進する看護介入の全体構造	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 高知女子大学看護学会誌	6. 最初と最後の頁 81～93
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 渡邊美保、野嶋佐由美	4. 巻 42巻
2. 論文標題 海外における災害後の高齢者のリロケーションケアに関する文献検討	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 高知女子大学看護学会	6. 最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件/うち国際学会 3件）

1. 発表者名 Miho Watanabe, Sayumi Nojima
2. 発表標題 Nursing Interventions That Facilitate Relocation of Older Adults: Focusing on Reconciling Hopes with Reality
3. 学会等名 The 6th International Research Conference of World Academy of Nursing Science（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Miho Watanabe, Sayumi Nojima
2. 発表標題 Nursing Interventions That Facilitate Elderly Relocation from the Acute to Maintenance Phase
3. 学会等名 23rd East Asian Forum of Nursing Scholars conference（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Miho Watanabe, Sayumi Nojima
2. 発表標題 Nursing Intervention to Improve Elderly patients Relocation from Hospital
3. 学会等名 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----